

高橋和巳  
作品集  
8



# 8 高橋和巳作品集

河出書房新社

高橋和巳作品集 8 エッセイ集 2 (文学篇) ©1970

---

1970年7月30日初版発行

1974年12月25日 8版発行

著 者 高 橋 和 巳

装幀者 栗 津 潔

発行者 中 島 隆 之

印刷者 内 海 精 一

発行所 株式 河出書房新社  
会社

東京都千代田区神田小川町3-6

電 話 東 京 292-3711 (大代表)

振 替 東 京 10802

---

印刷・内海印刷 製本・小高製本

高橋和巳作品集 8

エッセイ集 2 (文学篇)

文学の責任 11

文学の責任 13

現代思想と文学 47

戦争文学序説——運命について 66

戦後文学の思想 77

戦後文学私論 103

戦後派の方法的実験 117

政治と文学 125

〈性〉的素材主義批判 136

戦後作家論 145

逸脱の論理——埴谷雄高論 147

自己権力と自己無化——埴谷雄高 177

自立の精神——竹内好における魯迅精神 179

〈反対の墓場〉から——竹内好 199

忍耐の思想——武田泰淳 200

日常への回帰——椎名麟三 215

現代の地獄——野間宏 225

仮面の美学——三島由紀夫 234

苦しむ才能——井上光晴 242

無常の視線——深沢七郎 252

明哲保身——『深沢七郎選集』のために 259

## 知識人の文学 261

知識人の苦悩——夏目漱石 263

実事求是の精神——島崎藤村 278

滅びの使徒——太宰治 288

詩人との出会いと別れ——三好達治 296

認識と実践の人——桑原武夫 300

詩の絆——吉川幸次郎『随想集』のために 307

私のドストエフスキー——『死の家の記録』

革命の中の死——ロープシンの『漆黒の馬』

長篇の愉しみ——レオーノフ

318

文学存在の基盤——ソルジェニツイン

320

想像の魔性

323

なぜ長篇小説を書くか

325

もう一つの劇

332

文学否定論について

337

想像の魔性について

339

事実と創作

341

妄想のたのしみ

346

孤独なる遊戯

349

みやびと野暮

351

極限と日常

352

キリスト教の投影

354

〈沈黙する神〉と転向

358

|            |     |
|------------|-----|
| 悪の進化について   | 360 |
| 文学者にみる視野脱落 | 361 |
| 文人相軽       | 363 |
| 文学と友情      | 365 |
| 文学と季節      | 367 |
| 詩と風土       | 370 |
| 自然への讃歌と挽歌  | 375 |
| 孤独なる遊戯     | 377 |
| 小さな野心      | 378 |
| 私の小説作法     | 379 |
| 私の文章修業     | 380 |
| 転向文学論      | 383 |
| 孤独なる邪宗     | 386 |
| 「義」を渴望する常民 | 389 |
| 文学の中の人間関係  | 390 |
| 心に降る雪、積る雪  | 392 |

〈志〉ある文学 393

作家の行動について 395

文学の苦しみ 397

長篇の功罪 399

二つの「飛翔」 401

投稿について 403

京都の文学青年達 405

『近代文学』終刊号を読んで 407

## 文芸時評、その他 409

見捨てられる現在——文芸時評・一九六三年十月号 411

自己主張の荒蕪と自己放棄の抒情——文芸時評・一九六三年十一月号 413

文学の幅——文芸時評・一九六三年十二月号 416

戦争と民族の問題——文芸時評・一九六四年七月号 418

〈事実〉の返り血を浴びよ——文芸時評・一九六四年八月号 421

思想小説への希求——文芸時評・一九六四年九月号 424

自我確立の歴史——藤枝静男『ヤゴの分際』 427

戦乱の中の人間群像——海音寺潮五郎『孫子』 428

書生・壮士・浪人——花田清輝『シラノの晩餐』 430

額縁のなかの静寂——辻邦生『廻廊にて』 431

自己喪失の回復——奥野健男『文学的制覇』『文学は可能か』 432

戦後派の二つの流れ——中村真一郎『戦後文学の回想』 433

ウェーリーの白楽天 434

中国古典詩のフォーヴィスム——鈴木虎雄注釈『李長吉歌詩集』 436

常民の精神——『一九六八年佐世保詩歌集』跋 438

吉川幸次郎『中国詩史』解説 441

〈巻末論文〉

日本文学史の中の高橋和巳

杉浦明平 445

高橋和巳作品集 8



エッセイ集2  
(文学篇)



# 文学の責任



## 文学の責任

夜の冷氣から身をまもうとして花が花卉をとじ、母親が乳呑児を胸ふかくだきしめる暗黒の夜がすぎ、いまだしられざる真理と曙光が東の空に白い光芒をちらす早朝の一時期を、いにしえ、ヴェーダをのこした東方の民は、〈双神の時間〉となづけた。太陽の神は二人の御者・アシシュヴィンのみちびきにおうじて、そのかがやかしい姿をはじめてあらわすことができるのだと歌われる。Surya は Asasib と分解でき、馬にまたがる意味をもち、黄金の車にのり、太陽の姫君 Surya をともなうて黎明と日の出のあいだを天かける。彼らは蜜の皮膚をして甘き蜜の鞭をうちふり、あるいは海洋におぼれた者をたすけ、あるいは盲者に意識をあたえ、跛者をあゆませ、衰老の者の回春をはかる奇蹟力をもつという。

——しかし、暗黒と光明、絶望と期待との陰陽交錯するわずかばかりの時間を、すばやく駆けすぎる双生の御者とはいったい何物だろう。神話はただそれだけをするすにとどまり、みずから世界に光をみちびいた双生神じしんが、はたして太陽の光輝と慈味をあいわいたかどうかについては、なにも

記録されていない。いや、双生神のもたらしたうす明りが、しんに黎明のそれであつたか、逆に、まさかさまに、荒涼たる不毛へとおちてゆく黄昏の輝きであつたかどうかについても、だれも追証しようとはしなかった。私は妄想するのだが、そのうす明りは、背後から姿をあらわそうとする太陽の予光とはかならずしも樂觀しがたく、もしかすると光明を求めつつも得られぬ者の苦痛あるいは、それ自体存在の価値なきものの自己主張の執念から発するはかない凡愚の火花だったかもしれない。勝手な解釈をつけくわえれば、ちょうど、創造的な天才と痴呆や狂気が極度に相似するといわれるように、まったく相反した二つのうす明りの現象的相似性ゆえに、その期待と恐怖、安息と苦痛の瞬間が、双神の時間と命名されたのでなからうか。察するに、双生の御者自身は、つまるところ太陽を仰ぎえず、道をふみあやまり、たがいに仇敵のごとくいがみあいながら息たえる運命にあるのかもしれない。

発端を奇妙に非学問的な物語からはじめたのは、その双神の運命と使命にたくして、人間の精神と現実の場でおこなわれる明暗の出会いと、そのいわば奇蹟の時間の様相をときあかしたく思つたからにほかならぬ。いま、議題としようとする文学なる一つの運命的な点となみ、そしておそらく〈愛〉や〈奇蹟〉や〈美〉なども、主張するよりもむしろ物語られるべきだろうから。すくなくとも物語的思考をある程度必要とする。劉勰の『文心雕龍』は「文の徳（エネルギー）たるや大いなるかな、日月と並び生ずるには何ゆえぞや。」とい

うけれども、がんらい文学は、現実と非現実との境界にただよう一種のうす明りのようなものであり、注意しない者には解りもせず見えないものである。たとえ、人はときおり、おのれの足もとから目をはなして天空をふり仰ぐ義務があるにせよ、みずから意志せぬ者に命令するわけにはいかない。うす明りの第一性格は、ほかならぬその非強調性にあるからである。しかし、文学の寛容、いいかえれば、読者の絶対的な選択の自由という関所をくぐる文学にも、（そしてその他の言語活動にも）それにもかかわらず、やはり一つの責任がある。非強調性は、無責任とはかさならないのである。しかし、それを説くまえに、なおわれわれはいささかの予備考察を必要とする。

### 新聞と小説

人は生れ落ちるや、いやおうなく共同体にくりこまれ、自覚的存在となったとき、家族から世界にいたる社会共同体の秩序や道義、そして利害關係に對面する。現在、われわれがそれに所屬しかつ對面する十八、九世紀以降の近代資本主義体制のなかでの、一般文化的な言語活動の兩極は、おそらくは新聞と小説であろう。かつては教会や巡回牧師の説教、あるいは官庁布告文や出所不明の流言などを媒介としていた世界認識は、新聞がひきうけて開放し、小説はほぼ同時に言語芸術の代表選手となった。しかし二十世紀後半にはいって、すでに、政治・経済・社会の諸現象の伝達は新聞の独占では

なくなり、また勃興する民主制に分婉され、その推進者ともなっていた新聞は、もっぱら独占企業と化しつつある。けれども、アテネ民主制の崩壊は新聞がなかったためだとすらいわれる新聞の、共同体関与にはたす役割はやはり今なお大きい。おなじ土壌からうまれた双生児といえる十九世紀文学は、さいしよ教養小説（封建体制において鎖國政策をとり近代化に立ちおくれた日本や中国では、新知識輸入の海外奇談）あるいは諷刺小説や政治小説として、新聞と呼応する啓蒙活動をおこなった。けれどもしだいにその意図は分離し、おおむね新聞をもふくめたこの社会への反抗態勢をととのえたようにみえる。自国の、海外の、政治趨勢を新聞が報道し論説しつつ、その組織を独占化し肥大する一方、小説は、近代社会の合理主義、機械主義、そしてその画一化に抗して、その制作から享受にいたるまでが極小的な、孤独な操作となり、近代的人間の人間性をその疎外感、不安、焦燥、において表現してきた。しかし二十世紀神話のミステリーは、その二者のたんなる乖離・背反にあるのではない。なぜなら、また一方では新聞は小説の無視することのできない大きな発表機關のひとつとなっていくたからである。とくに日本・中国では、東京や大阪・上海や北京で、明治維新・阿片戦争より以後、夏目漱石、森鷗外、二葉亭四迷、長塚節の代表作や、また李伯元の『官場現形記』などの文学作品の発表舞台となつた。

新聞がその紙面の一部に小説をとりあげたのは、民衆が自分のすむ現実の諸相にかんして、とりわけ、政治的見解をた